

伝へ承る御消息の状に云はく、法華經を日ごとに一品づつ、二十八日が間に一部を読みまいらせ候ひしが、当時は薬王品の一品を毎日の所作にし候。たゞもとの様に一品づつをよみまいらせ候べきやらんと云云。

法華經は一日の所作に一部八卷二十八品、或は一巻、或は一品・一偈・一句・一字、或は題目ばかりを南無妙法蓮華經と只一遍となへ、或は又一期の間に只一度となへ、或は又一期の間にたゞ一遍唱ふるを聞いて隨喜し、或は又隨喜する声を聞いて隨喜し、是体に五十展転して末になりなば志もうすくなり、隨喜の心の弱き事、二三歳の幼稚の者のかなきが如く、牛馬なんどの前後を弁へざるが如くなりとも他經を学する人の利根にして智慧かしこく、舍利弗・目連・文殊・弥勒の如くなる人の、諸經を胸の内にかべて御坐しまさん人々の御功德よりも、勝れたる事百千万億倍なるべきよし、經文並びに天台・妙樂の六十巻の中に見え侍り。されば經文には「仏の智慧を以て多少を籌量すとも其の辺を得ず」と説かれて、仏の御智慧すら此の人の功德をばしるしめさず。仏の智慧のありがたさは、此の三千大千世界に七日、若しは二七日などふる雨の数をだにもしるしめして御坐し候なるが、只法華經の一字を唱へたる人の功德をのみ知るしめさずと見えたり。何に況んや、我等逆罪の凡夫の此の功德を知り候ひなんや。

然りと云へども如来滅後二千二百余年に及んで、五濁さかりになりて年久し。事にふれて善なる事ありがたし。設ひ善を作す人も一の善に十の悪を造り重ねて、結句は小善につけて大悪を造り、心には大善を修したりと云ふ慢心を起こす世となれり。然るに如来の世に出でさせ給ひて候ひし国よりしては、二十万里の山海をへだて、東によれる日域辺土の小島に生まれ、五障の雲厚うして、三従のきづなにつなぐれ給へる女人なんどの御身として、法華經を御信用候はありがたしなどとも申すに限りなく候。凡そ一代聖教を披き見て、顯密二道を究め給へる様なる智者学匠だにも、近来は法華經を捨て念仏を申し候に、何なる御宿善ありてか、此の法華經を一偈一句もあそばす御身と生まれさせ給ひけん。されば此の御消息を拝し候へば、優曇華を見たる眼よりもめづらしく、一眼の龜の浮木の穴に値へるよりも乏しき事かなと、心ばかりは有りがたき御事に思ひまいらせ候間、一言一点も隨喜の言を加へて善根の余慶にもやとはげみ候へども、只恐らくは雲の月をかくし、塵の鏡をくもらすが如く、短く拙き言にて殊勝にめでたき御功德を申し隠し、くもらす事にや候らんと、いたみ思ひ候ばかりなり。然りと云へども、貴命もだすべきにあらず。一滴を江海に加へ、燭火を日月にそえて、水をまし光を添うと思し食すべし。

先づ法華經と申すは八巻・一巻・一品・一偈・一句乃至題目を唱ふるも、功德は同じ事と思し食すべし。譬へば大海の水は一滴なれども無量の江河の水を納めたり。如意宝珠

は一粒なれども万宝をふらす。百千万億の滴珠も又これ同じ。法華經は一字も一の滴珠の如し。乃至万億の字も又万億の滴珠の如し。諸經諸仏の一字一名号は、江河の一滴の水、山海の一石の如し。一滴に無量の水を備へず。一石に無数の石の徳をそなへもたず。若し然らば、此の法華經は何れの品にても御坐しませ、只御信用の御坐さん品こそめづらしくは候へ。総じて如来の聖教は、何れも妄語の御坐すとは承り候はねども、再び仏教を勘へたるに、如来の金言の中にも大小・権実・顕密など申す事、經文より事起こりて候。随つて論師人師の釈義にあらあら見えたり。詮を取つて申さば、釈尊の五十余年の諸教の中に、先四十余年の説教は猶うたがはしく候ぞかし。仏自ら無量義經に「四十余年未顕眞実」と申す經文、まのあたり説かせ給へる故なり。法華經に於ては、仏自ら一句の文字を「正直に方便を捨て、但無上道を説く」と定めさせ給ひぬ。其上、多宝仏大地より涌出でさせ給ひて、「妙法華經皆是眞実」と証明を加へ、十方の諸仏皆法華經の座にあつまりて、舌を出だして法華經の文字は一字なりとも妄語なるまじきよし助成をそへ給へり。譬へば大王と后と長者等の一味同心に約束をなせるが如し。若し法華經の一字をも唱へん男女等、十惡・五逆・四重等の無量の重業に引かれて惡道におつるならば、日月は東より出でさせ給はぬ事もありとも、大地は反覆する事もありとも、大海の潮はみちひぬ事もありとも、破たる石は合ふとも、江河の水は大海に入らずとも、法華經を信じたる女人の、世間の罪に引かれて惡道に墮つる事はあるべからず。若し法華經を信じたる女人、物をねたむ故、腹のあしきゆへ、貪欲の深きゆえなどに引かれて惡道に墮つるならば、釈迦如来・多宝仏・十方の諸仏、無量曠劫よりこのかた持ち来たり給へる不妄語戒忽ちに破れて、調達が虚誑罪にも勝れ、瞿伽利が大妄語にも超えたらん。争でかしかるべきや。法華經を持つ人憑もしく有りがたし。但し一生が間一惡をも犯さず、五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒・無量の戒を持ち、一切經をそらに浮かべ、一切の諸仏菩薩を供養し、無量の善根をつませ給ふとも、法華經計りを御信用なく、又御信用はありとも諸經諸仏にも並べて思し食し、又並べて思し食さずとも、他の善根をば隙なく行じて時々法華經を行じ、法華經を用ひざる謗法の念仏者などにも語らひをなし、法華經を末代の機に叶はずと申す者を科とも思し食さずば、一期の間行じさせ給ふ処の無量の善根も忽ちにうせ、並びに法華經の御功德も且く隠れさせ給ひて、阿鼻大城に墮ちさせ給はん事、雨の空にとゞまらざるが如く、峰の石の谷へころぶが如しと思し食すべし。十惡五逆を造れる者なれども、法華經に背く事なければ、往生成仏は疑ひなき事に侍り。一切經をたもち、諸仏菩薩を信じたる持戒の人なれども、法華經を用ひる事なければ、惡道に墮つる事疑ひなしと見えたり。予が愚見をもて近來の世間を見るに、多くは在家・出家、誹謗の者のみあり。但し御不審の事、法華經は何れの品も先に申しつる様に愚かならねども、殊に二十八品の中に勝れてめでたきは方便品と寿量品にて侍り。余品は皆枝葉にて候なり。されば常の御所作には、方便品の長行と寿量品の長行とを習ひ読ませ給ひ候へ。又別に書き出

だしてもあそばし候べく候。余の二十六品は身に影の随ひ、玉に財の備はるが如し。寿量品・方便品を読み候へば、自然に余品はよみ候はねども備はり候なり。薬王品・提婆品は女人の成仏往生を説かれて候品にては候へども、提婆品は方便品の枝葉、薬王品は方便品と寿量品の枝葉にて候。されば常には此の方便品・寿量品の二品をあそばし候ひて、余の品をば時々御いとまのひまにあそばすべく候。

又御消息の状に云はく、日ごとに三度づつ七つの文字を拝しまいらせ候事と、南無一乗妙典と一万遍申し候事とをば、日毎にし候が、例の事に成りて候程は、御経をばよみまいらせ候はず。拝しまいらせ候事も、一乗妙典と申し候事も、そらにし候は苦しかるまじくや候らん。それも例の事の日数の程は叶ふまじくや候らん。いく日ばかりにてよみまいらせ候はんずる等云云。

此の段は一切の女人ごとの御不審に常に問はせ給ひ候御事にて侍り。又古も女人の御不審に付いて申したる人も多く候へども、一代聖教にさして説かれたる処なきかの故に、証文分明に出だしたる人もおはせず。日蓮粗聖教を見候にも、酒肉・五辛・婬事などの様に、不浄を分明に月日をさして禁めたる様に、月水をいみたる経論を未だ勘へず候なり。在世の時、多く盛んの女人尼になり、仏法を行ぜしかども、月水の時と申して嫌はれたる事なし。是をもて推し量り侍るに、月水と申す物は外より来たれる不浄にもあらず、只女人のくせかたわ生死の種を継ぐべき理にや。又長病の様なる物なり。例せば尿尿などは人の身より出づれども能く浄くなしぬれば別にいみもなし。是体に侍る事か。されば印度・支那などにいたくいむよしも聞こえず。但し日本国は神国なり。此の国の習ひとして、仏菩薩の垂迹不思議に経論にあいぬ事も多く侍るに、是をそむけば現に当罰あり。委細に経論を考へ見るに、仏法の中に随方毘尼と申す戒の法門は是に当たれり。此の戒の心は、いたう事かけざる事をば、少々仏教にたがふとも、其の国の風俗に違ふべからざるよし、仏一つの戒を説き給へり。此の由を知らざる智者共、神は鬼神なれば敬ふべからずなど申す強義を申して、多くの檀那を損ずる事ありと見えて候なり。若し然らば此の国の明神、多分は此の月水をいませ給へり。生を此の国にうけん人々は大きに忌み給ふべきか。但し女人の日の所作は苦しかるべからずと覚え候か。元より法華経を信ぜざる様なる人々が、経をいかにしても云ひうとめんと思ふが、さすがにたゞちに経を捨てよとは云ひえずして、身の不浄などにつけて、法華経を遠ざからしめんと思う程に、又不浄の時、此を行ずれば、経を愚かにしまいらするなどをどして罪を得させ候なり。此の事をば一切御心得候ひて、月水の御時は七日までも其の気あらん程は、御経をばよませ給はずして、暗に南無妙法蓮華経と唱へさせ給ひ候え。礼拝をも経にむかはせ給はずして拝せさせ給ふべし。又不慮に臨終などの近づき候はんには、魚鳥などを服せさせ給ひても候へ、よみぬべくば経をもよみ、及び南無妙法蓮華経とも唱へさせ給ひ候べし。又月水などは申すに及び候はず。又南無一乗妙典と唱へさせ給ふ事、是同じ事には侍れども、天親菩薩・天台大師等の唱へさせ給ひ

候ひしが如く、只南無妙法蓮華經と唱へさせ給ふべきか。^{これしさい}是子細ありてかくの如くは申
し候なり。^{あながしこ}穴 賢 穴 賢。

文永元年卯月十七日
大学三郎殿御内御報

日 蓮 花 押